疲れてゐるのに、道の險しさは不意うちである。瀧壺に來て見れば、「來て見ればさほどでもなし」といふのは山ばかりではない。しかし登つて見なければ山の高さはほんとに知り得ない。飛びこんでみなければ、眞の瀧の偉大さも知り得まい。

霧降りの瀧見物。

今度こそ瀧に出るだらう、と幾度か思つた事であらう。山は行けども行けども水音もしない。ほゝけた薄原のかなたの杉の森も、紅葉の山の間に見える。遠くの雲の山もうれしいものであつた。日はうす曇りして山は靜か、その中を一行は、りんどうを摘んだり、野菊を折りながらゆく。早い人と疲れた人との間には一丁ほどの隔りがある。細田先生は遲れた人を待つては千鳥足の御講義をなさる。瀧を見晴す茶屋についたのは二時間も歩いた後であつたらうか、茶屋からは、丁度、瀧の眞中だけ見える、瀧に脊を向けてお辨當を使つて、五分程ながめてもう歸り仕度をはじめる。隣りのあづまやには、細田先生の所謂、ゼニトラレマンがゐた。その人たちは、瀧壺に下りるとよろしいと日本語でいつた。細田先生は「瀧は華嚴が一番よろしい、霧降りに霧がなければだめです」と會話をなすつた。一行は、茶屋の裏から取つた黃菊を、はる〳〵こゝまで來た優勝旗にと髮にかざして、またどん〳〵と坂を下りた。

日光小學校

霧降りにゆく道に、日光小學校によつて荷物をあづかつていただいた。瀧から疲れた足をひきづつて又、この應接室に來たのは二時もすぎたか、兒童も歸つたあとで學校はきれいに、掃除せられてあつた。學校の歷史も成績も一間に示したこの室で、茶を戴きながら、細田先生から、勝さんの書かれた「千里行者」の額についてお話を伺ふ。

これで日光見物も終つて一行は停車場へといそいだ。

中禪寺湖から足尾へ

文三　地理部生

○

すつきりすみきつた中禪寺湖をみつめてゐますと、人間の殼を脫して、水底にすひこまれてゆきさ

うです。

○

中禪寺湖の西岸に舟を乘りすてゝから、低い峠を一つ越すと、早、足尾の町のけぶりが見える。

もや〳〵としたうすい綠色のけぶりが低く山間をへめぐつて居る。

山には草も木も一本もない。ぢつとその山にむかつてゐると泪がにぢんで來さうになる。

○

置物のやうにならべた日光や、油繪のやうな中禪寺湖によつた心をもつて、煙つたこの鑛山町に這入つた時、急に或る現實の尊さがしみ〴〵と感じられてきた。

○

「やい女のくせに眼がねなんかかけて居やがる、なまいきだなあ、おい〳〵あとの奴は二つもかけて居るぜ。」

足尾の町を通る八人の一行を、いま小學校がへりの子供らが兩側に列をつくる樣にならんで、物めづらしさうになながめて居る。

「素通しだらうぜ」すぐわきの子供がさゝやいた。

○

夜、繪葉書を買ひに宿を出ると、眞黑い山が闇の中に壓しかぶさるやうに目の前に迫る、「おゝ怖しい」と云つて後を向くと其處にも又もつと大きい山が大入道のやうにつゝ立つて居るので進退谷まつてしまつた。

足尾は山の町である。

○

夏目さんの坑夫が長い前から此處の人々と私とを結びつけてゐた。

霧の深く立ちこめた硝子戸の外をつゞいてゆく坑夫の一人〳〵になつかしく眼をそゝぎながら、大輪の菊のかざられた鑛山の事務所の一室にゐるといふ事が夢のやうに思はれた。

○

朝霧にうすしめりせる土ふみて坑夫語らずゆくがさびしき

うちむれて霧の中ゆく坑夫らのその足音もさびしかりけり

銅をやく烟も交り赤埴の山ほの霧ふ秋の朝かな